

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民博通信 Online no.5; 表紙,目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009882

みんぱく
つうしん
オンライン

民博通信

No.5
2022

— online —



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

民博通信

— online —

| No.5
| 2022

『民博通信 Online』について

国立民族学博物館は、文化人類学や民族学研究のセンターとして、世界の諸民族の社会や文化の研究を進めるとともに、その成果を出版などのかたちで発信しています。

現在、本館では、人間文化の新たな価値体系の創出を目指す「基幹研究プロジェクト」、現代の人類社会が直面する課題の分析を目的とする「特別研究」、特定のテーマについて館内外の研究者と一緒に研究を進める「共同研究」などをおこなっています。

『民博通信 Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。

表紙写真

千葉県酒々井町上岩橋の獅子舞（詳細は本誌10-11頁）。

CONTENTS

| Start up

共同研究 現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育—ジェンダーとリプロダクションの学際的比較研究

アジアのリプロダクションとテクノロジーの多様な関係を探る
白井千晶 ————— 4

共同研究 被傷性の人類学／人間学

人間の傷つきやすさ
竹沢尚一郎 ————— 6

共同研究 観光における不確実性の再定位

「不確実性」を観光の脈略で問い直す意義
土井清美 ————— 8

共同研究 民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化

日本民俗音楽の伝承と研究を媒介するサウンド・アーカイブの構築に向けて
植村幸生 ————— 10

共同研究 日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究—国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に

太平洋地域の古写真資料群に関する分析から日本人の太平洋コレクション形成を探る
丹羽典生 ————— 12

共同研究 伝承のかたちに「触れる」プロジェクト—「3Dプリント×伝統素材・技法」のアプローチから

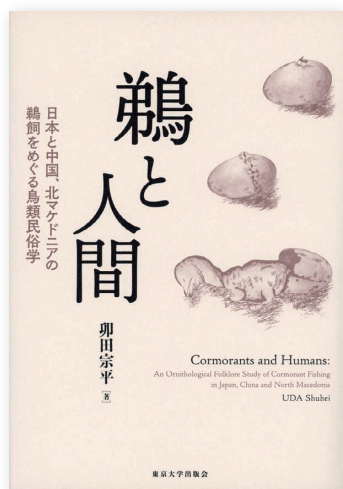
「デジタル×アナログ」「触覚×視覚」から迫る図像の魅力
宮坂慎司 ————— 14

新刊の紹介 ————— 16

国立民族学博物館の研究 ————— 20

新刊の紹介

本館では、館外での出版物を奨励する制度があります。★の印は、その制度を利用して刊行された出版物です。タイトルをクリックすると詳細情報に移動します。



鵜と人間

—日本と中国、北マケドニアの鵜飼をめぐる鳥類民俗学 ★
卯田 宗平 著

定価：12,650円(税込) 488頁 東京大学出版会 2021年12月27日刊行

人間は鵜とどのようにかかわっているのか。ひとつの問いを出発点に、日本、中国、そして東欧に位置する北マケドニア共和国の鵜飼漁を取りあげ、その技術や知識、ウミウやカワウの行動や生態、淡水魚の食文化の調査研究を通して、より普遍的な視点から、「飼い慣らしすぎない」という動物利用の論理やドメスティケーションの生起をめぐる解釈枠組みを新たに導きだす。くわえて、本書では飼育下におけるウミウの繁殖生態や行動特性を鳥類学の成果も踏まえながら初めて明らかにする。



音楽の未明からの思考

—ミュージッキングを超えて

野澤 豊一・川瀬 慈 編著

定価：3,300円(税込) 312頁 アルテスパブリッシング
2021年12月22日刊行

本書は、クリストファー・スモールの「ミュージッキング」という概念を手掛かりに、音楽研究を刷新するねらいを持つ。文化人類学、民族音楽学、ポピュラー音楽研究、歴史人類学、音楽教育学、舞踊研究などを専門とする研究者16人が世界各地でのフィールドワークに基づき、人と人、人とモノ、人と観念の「出会い」の場としての音楽実践に着目し、音楽の未明とでも呼びうる地平から思考を試みる。本書は国立民族学博物館共同研究プロジェクトの成果論集である。



躍動するインド世界の布

上羽 陽子・金谷 美和 編

定価：2,090円(税込) 132頁 昭和堂 2021年10月15日刊行

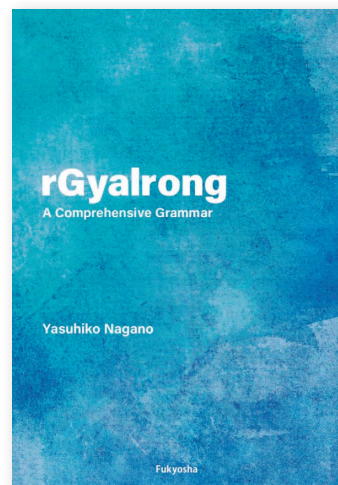
本書は、企画展「躍動するインド世界の布」の関連図書である。衣装だけではなく、人生儀礼における贈与品や神がみへの奉納品、社会運動でのシンボル、グローバルに展開するインド産の布に着目し、インド世界における布の機能や役割を理解する枠組みを提示している。人間文化研究機構「MINDAS(南アジア地域研究、国立民族学博物館拠点)、代表：三尾稔」の研究事業(2016-2021年度)における「布班(代表：上羽陽子)」の共同研究の成果であり、インド社会をつくりだしている人びとの営みを多彩な布とともに考察している。

rGyalrong A Comprehensive Grammar

Yasuhiko Nagano

定価：11,000円（税込） 399頁 + CD-ROM 風響社
2021年11月30日刊行

本書は中国四川省西北部に話されるギャロン（嘉戎）語の記述文法で、2018年に出版された『嘉戎語文法研究』（汲古書院）の改訂英語版である。ギャロン語はチベット・ビルマ系諸語の古態を留め、チベット・ビルマ祖語の再構成に不可欠とされるが、まとまった文法は少なく、系統関係も確定していない。小著は林向榮、M. Prins による文法に次ぐ3番目の包括的記述である。内容については、池田巧教授（京都大学）による形態統辞論に関する日本語版への詳細な書評が『東方』458号（2019年4月）[🔗](#)に出ているので参照されたい。



音にさわる

—はるなつあきふゆをたのしむ「手」—

広瀬 浩二郎 作 日比野 尚子 絵

定価：1,540円（税込） 12頁 偕成社 2021年10月刊行

春夏秋冬にはそれぞれの音がある。その音を視覚以外の感覚を駆使して、身体で感じてみよう。視覚優位の現代社会にあって、触角（全身に分布するセンサー）の復権を訴えるのが本書刊行の目的といえる。本書は21世紀版の「耳なし芳一」、すなわち耳を切り取られた後の芳一の物語を描く試みでもある。各ページに登場するサクラ・セミ・落ち葉・雪のイラストには、触感豊かな隆起印刷が施されている。見ても楽しく、さわると想像力が刺激されるユニークな絵本は、僕たちが触角を研ぎ澄ます手がかりとなるだろう。各方面で非接触が強調されるコロナ禍の今、老若男女、さまざまな読み手が本書を手に取り、そこから触発の連鎖が広がることを期待したい。



年表で読む近代日本の身装文化

大丸 弘・高橋 晴子 著

定価：17,600円（税込） 800頁 三元社 2021年9月30日刊行

和装と洋装が拮抗した明治維新以降、第二次世界大戦終結までの期間を対象として、その文化変容を庶民の日常生活のなかで捉えた近代日本身装（身体と装い）史。一回的な「事件」と、装いの流れの様相を示した「現況」、および人びとの記憶をたどる「回顧」で構成した独自の枠組みの年表形式で綴る。同時代の新聞記事を中心として、膨大な資料が現在の洋装生活に至った過程を明らかにしていく。本書は、既刊の『日本人のすがたと暮らし—明治・大正・昭和前期の身装』（三元社、2016年）と『新聞連載小説の挿絵でみる近代日本の身装文化』（三元社、2019年）の姉妹編である。





戦争の記憶と国家

—帰還兵が見た殉教と忘却の現代イラン

黒田 賢治 著

定価：3,520円（税込） 254頁 世界思想社 2021年9月30日刊行

中東の大国イランでは、近年、革命防衛隊を中心とした「軍」勢力の政治経済的台頭が目覚ましい。本書はイラン・イラク戦争（1980-88年）からの一人の帰還兵と彼の周辺に集う人びとへのフィールド調査に基づいて、「軍」勢力の支持基盤をめぐるイラン社会の構造にアプローチしている。忘却に抗い戦争の記憶を紡ごうとする遺族や従軍経験者、新たな世代を魅了する戦争の「娯楽」化、周辺国への紛争介入を正当化させてきた言説、そして体制維持のために主体的に「動員」されながらも変化する個人の可能性を描きながら、イラン政治の実相に迫る。

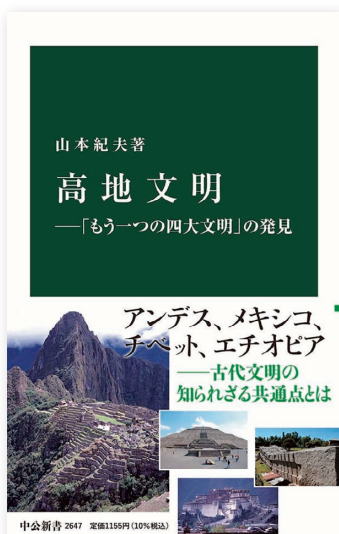


中東・イスラーム世界への30の扉

西尾 哲夫・東長 靖 編著

定価：2,970円（税込） 365頁 ミネルヴァ書房 2021年7月20日刊行

中東・イスラームは日本から遠い別世界なのだろうか？「歴史」「宗教・社会」「経済・産業」「政治」「文化・精神」の30のトピックから現代中東・イスラーム世界をひもとく。人間文化研究機構の現代中東地域研究プロジェクトによる最新の成果を取り込みつつ、現地の人びととの協働による研究成果として、ベテランや中堅の研究者だけでなく、若手研究者の斬新な視点による研究成果も発信する。現代世界で問題になっている 이슈群に対する中東・イスラーム世界の見方を提供し、オルタナティブを提示する。大学の教科書としても最適。



高地文明

—「もう一つの四大文明」の発見

山本 紀夫 著

定価：1,155円（税込） 336頁 中央公論新社 2021年6月22日刊行

私が初めてアンデス調査に出かけたのは、もう50年以上も前の1968年のことであった。この年、私は京都大学の調査隊に参加して、ペルーやボリビアなどの中央アンデスを半年ほどかけて車で駆けまわっていた。調査の主目的は、中央アンデスにおける農耕文化の特徴を明らかにすることであったが、その道中でインカ帝国やそれ以前にアンデスで生まれた諸文化の遺跡を目にすることができた。私たちが駆けめぐっていた地域は、はからずも古代アンデス文明が誕生し、発展したところだったのだ。こうして、私はアンデス文明に関心をもつようになったが、それとともに、なぜアンデス文明は旧大陸の「四大文明」と同等に扱われないのだろうか、という疑問が生じてきたのであった。その後、中米に栄えたメソアメリカ文明も旧大陸の「四大文明」に匹敵するほどに大規模で、すぐれた文明であると思えた。その結果、私は従来の「四大文明」説にかえて「もう一つの四大文明」を提唱するようになった。この「もう一つの四大文明」こそは、今回の新刊書で発表した「高地文明」にほかならない。

フィールド言語学者、巣ごもる。

吉岡 乾 著

定価：1,980円（税込） 288頁 創元社 2021年6月20日刊行

普段はパキスタンやインドの山奥でマイナー言語を調査している研究者が、新型コロナウイルス感染症が蔓延してしまったためにフィールドへ出られなくなり、長らく「巣ごもり」をすることとなってしまった！ 困ったぞ！ 本書は、著者がそのような生活の中、漫画や動画配信サイト、街中など、身の周りに溢れるさまざまな現象を言語学者目線で眺めて考えたことを綴った、言語学エッセイ本である。日本語や英語にとどまらず多様な言語の例を用いつつ、言語学の諸分野の知識を平たく親切そうに紹介して、言語学の沼へとぐいぐい道案内する。



モノとメディアの人類学

藤野 陽平・奈良 雅史・近藤 祉秋 編

定価：2,860円（税込） 280頁 ナカニシヤ出版 2021年3月10日刊行

モノとメディア。一見すると異質な取り合わせかもしれない。なぜモノとメディアを一緒に考えなくてはならないのだろうか。本書ではあらゆる存在が物質的なモノを媒介して存在していると考え、その媒介、すなわちメディアに着目する。そのうえで、ヒトとモノとのかかわりを通じて、メディアと社会の関係を文化人類学的に考察する。本書は多様なモノとメディアが織りなす身の回りのごく当たり前の出来事を、これまでとは違う方法で見つめなおす契機のひとつとなるに違いない。



世界の祭・儀礼 (DVD) 全4巻

山田 亨・佐久間 寛・丹羽 典生・吉田 ゆか子 監訳

定価：44,000円（税込、分売可） 丸善出版 2020年10月刊行

「世界の祭・儀礼」のDVDシリーズは、世界各地の広い意味での儀礼を紹介する映像作品である。神話に基づくものから、通過儀礼、さらには祭礼と呼ばれることもあるような大規模な集会まで、さまざまな儀礼を美しい映像のもと映し出している。もともとBBCの制作ということもあってか、日本の祭・儀礼の例として盆裁が出てくるのも興味深い。何を祭・儀礼として認知するかという文化人類学的な話題にも適した教材となるだろう。



このDVDシリーズは学校や公共図書館、研究機関などへの販売のみです。一般への販売はありませんのでご注意ください。

■ 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

	プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築			
開発型	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 — 東南アジア資料を中心に	小野林太郎	2019-2021
	中央・北アジアの物質文化に関する研究 — 民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018-2021
	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017-2021
強化型	データベース「焼畑の世界 — 佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	池谷 和信	2020-2021
	津波の記憶を刻む文化遺産 — 寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	日高 真吾	2020-2021
	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	三島 禎子	2020-2021
広領域連携型プロジェクト			
	文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルズ研究の新展開」内のユニット）	野林 厚志	2016-2021
	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日高 真吾	2016-2021
ネットワーク型プロジェクト			
	北東アジア地域研究	池谷 和信	2016-2021
	現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016-2021
	南アジア地域研究	三尾 稔	2016-2021

■ 特別研究

「現代文明と人類と未来 — 環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。この研究を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
不確実性の時代における家族の潜勢力 — モビリティ、テクノロジー、身体	森 明子	2021-2023
コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究	島村 一平	2020-2023
グローバル地域研究と地球社会の認知地図 — わたしたちはいかに世界を共創するのか？	西尾 哲夫	2020-2022
デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	飯田 卓	2019-2021
パフォーマンス・アーツと積極的共生	寺田 吉孝 / 福岡 正太	2018-2022

バックナンバーのご案内



「民博通信 online」
No.1
2020年3月31日発行



「民博通信 online」
No.2
2020年9月30日発行



「民博通信 online」
No.3
2021年3月31日発行

共同研究

特定のテーマについて、館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、成果をあげる研究活動です。

●は館外の代表

	研究課題	研究代表者	研究期間 (年度)	
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
	現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育 — ジェンダーとリプロダクションの学際的比較研究	白井 千晶	2021-2023	●
	被傷性の人類学/人間学	竹沢尚一郎	2021-2023	
	観光における不確実性の再定位	土井 清美	2021-2023	●
	日本列島の鵜飼文化に関するT字型学際共同アプローチ — 野生性と権力をめぐって	卯田 宗平	2020-2022	
	戦争・帝国主義と食の変容 — 食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	2020-2022	
	海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡 樹	2020-2022	●
	環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 — 人類史的視点から	岸上 伸啓	2020-2022	
	月経をめぐる国際開発の影響の比較研究 — ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	2020-2022	●
	不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う — モノ、制度、身体のみからみあい	森 明子	2020-2022	
	「描かれた動物」の人類学 — 動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	2020-2022	●
	グローバル化時代における「観光化/脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太郎	2019-2022	●
	島世界における葬送の人類学 — 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	2019-2022	
	社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位 — 12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合 洋尚	2019-2022	●
一般	人類史における移動概念の再構築 — 「自由」と「不自由」の相克に着目して	鈴木 英明	2019-2022	
	食生活から考える持続可能な社会 — 「主食」の形成と展開	野林 厚志	2019-2022	
	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018-2022	●
	統治のフロンティア空間をめぐる人類学 — 国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	2018-2022	●
	カネとチカラの民族誌 — 公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018-2022	●
	伝統染織品の生産と消費 — 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる	中谷 文美	2018-2022	●
	心配と係り合いについての人類学的探求	西 真如	2018-2021	●
	グローバル時代における「寛容性/非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	山 泰幸	2018-2022	●
	ネオリベラリズムのモラルティ	田沼 幸子	2017-2022	●
	人類学/民俗学の学知と国民国家の関係 — 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017-2022	●
	課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
	民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化	植村 幸生	2021-2023	●
	日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究 — 国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に	丹羽 典生	2021-2023	
	沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西 秀之	2019-2022	●
	博物館における持続可能な資料管理および環境整備 — 保存科学の視点から	園田 直子	2017-2022	
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
若手	伝承のかたち「触れる」プロジェクト — 「3Dプリント×伝統素材・技法」のアプローチから	宮坂 慎司	2021-2023	●
	先住民と情報化する社会の関わり	近藤 祉秋	2020-2022	●
	感性と制度のつながり — 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	2019-2022	●
	モビリティと物質性の人類学	古川不可知	2019-2022	●
	拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田 瑞穂	2018-2021	●



「民博通信 online」
No.4
2021年9月30日発行

民博通信

— Online —

ISSN 2758-0997

No.5

2022

『民博通信 Online』 No.5 (旧『民博通信』通巻169号)

2022年3月31日

編集委員

卯田 宗平 (編集長)

伊藤 敦規

岡田 恵美

樫永 真佐夫

編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話：06-6876-2151

<https://www.minpaku.ac.jp/>

制作

株式会社 遊文舎